

映画「ともだち」

について



友松あきみち

全国各地の幼稚園に関する新聞報道記事が日私幼の事務局にはこく明に集められている。秋には研究会などに関する記事が多く、年末から新春にかけては入園についての記事が多い。特に入園期の新聞報道には私幼同志の競争を皮肉くる記事が散見される。大新聞でさえ地方末端にいけばいわゆるなべかま競争なのだが、幼稚園は教育問題としてとりあげられるだけに、いつも私幼が保育界の低調さを代表して皮肉られるのだろう。今度日私幼でつくった教育映画「ともだち」もその意味では、はじめジャーナリズムにPR臭の濃い母親向映画と思われていたようだ。

たしかに数ある私幼の中には問題をもつ園があるではあろうが、最近のように組織がかたまってくると、衆は賢なりで団体としては教育組織としての自覚も高まり、映画一つつくる場合でも純粹に意欲的な面が強くなってきている。この映画が製作される意図には私幼教育のPRが主眼となっていたことは事実であるが、全国理事会や常任理事会ではあくまでも一般人の鑑賞にたえるものでなければならぬことが早くから申し合わされてきた。一般人とは幼児を持つ家庭ばかりではなくて、国民のどの層にも幼稚園教育の意味と必要性が理解されるものでなくてはならない。同時に両親はもとより私幼の現場の先生方にも、それぞれの立場で今一度幼稚園教育についてかえりみる機会を持つてもらえるような映画でなければ製作する意味も半減するわけであった。

製作の責任は日私幼の広報委員会が受持つことになったが、松村康平、石井哲夫両氏をはじめ広い分野から有能な人々に参画していただいでかなり長い討議の時期を持っている。できればシリーズとしてつづけていきたいので、保育の中で先ずどのような面に重きを置くかが大事な最初の課題であった。委員会

の空気は全国委員会の要請もあるので、幼稚園教育の使命を再認識するという意味でも集団生活と幼児の成長ということにしばって考えようということになった。近ごろは保育誌なども社会性をのばす保育をとりあげることが流行している。そのことはとりもなおさず人間形成ということと結びつけて幼稚園教育の真の意味を考えることになって来ているのだが実際には文章で伝え得るものには限界があった。はつきり言えば、そこには生の保育がないからである。

子どもと子ども、或いは子どもと教師が毎日の生活の変化の中でどんな心のふれ合いをもって教育をすすめていったらよいのか、このことは、たとえ一日をある園ですごしつぶささに参観し得たところで、よく納得できることではない。映画「ともだち」はその意味で現場の先生方に大きな示唆をあたえる結果になっている。一学期間というそもいつわりもない一つ生活の場で、幼稚園教育のねらいと教師の役割りがはつきりと具体的に示されているからである。

岩波映画に製作をおまかせすることに決定し、演出が時枝女史ときまってからは、どの園でどんな角度から撮るかというこ

とがすなわちこの映画の価値を決定することでもあった。候補園としてはかなり多くの園があげられたが、平凡な園であること、それは設備の上でも園児の家庭層についても一般人はもとより全国の現場の先生方に抵抗を与えぬことが必要であった。そして結局は撮影に比較的便利な園であること、演出の時枝女史とうまの合う現場であることという二つの条件によって、東京目黒の平塚幼稚園にご苦労いただくことになったのである。映画はその点何の作意もなく、ごく自然に私立幼稚園の一つの園をとりあげたにすぎない。

やがてこの映画は海外版も作製されて、日本の幼稚園教育の一面を外国の人々に理解していただく一助ともなるであろう。その時この映画が立派に国際的な批判にも応え得る教育的内容をそなえていることを日私幼の組織は確信している。私もこの映画をすでに何回か見なおしているが、その都度わが園の保育についても反省し、幼児の成長に対する理解が深まっていくことを感じている。どなたにも見ていただきたいこの映画が日本楽器の経済的援助と、岩波映画の献身的な協力によってできたということもこの機会に記録しておきたい。